うた時計

新美南吉

二月のある日、野中のさびしい道を、十二、三の少年と、皮のかばんをかかえた三十四、五の男の人とが、同じ方へ歩いていった。

風がすこしもないあたたかい日で、もう霜がとけて道はぬれていた。

かれ草にかげをおとして遊んでいるからすが、ふたりのすがたにおどろいて、土手をむこうにこえるとき、黒い背中が、きらりと日の光を反射するのであった。

「坊、ひとりでどこへいくんだ」

男の人が少年に話しかけた。

少年はポケットにつっこんでいた手を、そのまま二、

三ど、前後にゆすり、人なつこいえみをうかべた。
「町だよ」
これはへんにはずかしがったり、いやに人をおそれたりしない、すなおな子どもだなと、男の人は思ったようだった。
そこでふたりは、話しはじめた。
「坊、なんて名だ」
「れんていうんだ」
「れん？　れん平か」
「ううん」
と、少年は首を横にふった。

「じゃ、れん一か」

「そうじゃないよ、おじさん。ただね、れんていうのさ」

「ふうん。どういう字書くんだ。連絡の連か」

「ちがう。点をうって、一を書いて、ノを書いて、ふたつ点をうって……」

「むずかしいな。おじさんは、あまりむずかしい字は知らんよ」

少年はそこで、地べたに木ぎれで「廉」と大きく書いてみせた。

「ふうん、むずかしい字だな、やっぱり」

ふたりはまた歩きだした。
「これね、おじさん、清廉潔白の廉て字だよ」
「なんだい、そのセイレンケッパクてのは」
「清廉潔白というのは、なんにも悪いことをしないので、神様の前へ出ても、巡査につかまっても、平気だということだよ」
「ふうん、巡査につかまってもな」
そういって、男の人はにやりとわらった。
「おじさんのオーバーのポケット、大きいね」
「うん、そりゃ、おとなのオーバーは大きいから、ポケットも大きいさ」

「あったかい？」

「ポケットの中かい？　そりゃあ、あったかいよ。ぽこぽこだよ。こたつがはいってるようなんだ」

「ぼく、手を入れてもいい」

「へんなことをいう小僧(こぞう)だな」

男の人はわらいだした。でも、こういう少年がいるものだ。近づきになると、相手のからだにさわったり、ポケットに手を入れたりしないと、承知ができぬという、ふうがわりな、人なつこい少年が。

「入れたっていいよ」

少年は、男の人のがいとうのポケットに、手を入れ

た。

「なんだ、ちっともあったかくないね」

「はっは、そうかい」

「ぼくたちの先生のポケットは、もっとぬくいよ。朝、ぼくたちは学校へいくとき、かわりばんこに先生のポケットに手を入れていくんだ。木山先生というのさ」

「そうかい」

「おじさんのポケット、なんだか、かたい冷たいものがはいってるね。これなに？」

「なんだと思う」

「かねでできてるね……大きいね……なにか、ねじみ

たいなもんがついてるね」

するとふいに、男の人のポケットから美しい音楽が流れだしたので、ふたりはびっくりした。男の人はあわてて、ポケットを上からおさえた。しかし、音楽はとまらなかった。それから男の人は、あたりを見まわして、少年のほかにはだれも人がいないことを知ると、ほっとしたようすであった。天国で小鳥がうたってでもいるような美しい音楽は、まだつづいていた。

「おじさん、わかった、これ時計だろう」

「うん、オルゴールってやつさ。おまえがねじをさわったもんだから、うたいだしたんだよ」

「ぼく、この音楽だいすきさ」
「そうかい、おまえもこの音楽知ってるのかい」
「うん。おじさん、これ、ポケットから出してもいい？」
「出さなくてもいいよ」
すると、音楽は終わってしまった。
「おじさん、もう一ぺん鳴らしてもいい？」
「うん、だアれもきいてやしないだろうな」
「どうして、おじさん、そんなにきょろきょろしてるの？」
「だって、だれかきいていたら、おかしく思うだろう。

おとながこんな子どものおもちゃを鳴らしていては」
「そうね」
そこで、また男の人のポケットがうたいはじめた。
ふたりはしばらくその音をききながら、だまって歩いた。
「おじさん、こんなものを、いつも持って歩いてるの」
「うん、おかしいかい」
「おかしいなァ」
「どうして」
「ぼくがよく遊びにいく、薬屋のおじさんのうちにも、うた時計があるけどね、だいじにして、店のちんれつ

だなの中に入れてあるよ」
「なんだ、坊、あの薬屋へ、よく遊びにいくのか」
「うん、よくいくよ、ぼくのうちの親類だもん。おじさんも知ってるの？」
「うん……ちょっと、おじさんも知っている」
「あの薬屋のおじさんはね、そのうた時計をとてもだいじにしていてね、ぼくたち子どもに、なかなかさわらせてくれないよ……あれッ、またとまっちゃった。もう一ぺん鳴らしてもいい？」
「きりがないじゃないか」
「もう一ぺんきり。ね、おじさんいいだろ、ね、ね。

あ、鳴りだしちゃった」
「こいつ、じぶんで鳴らしといて、あんなこといって
やがる。ずるいぞォ」
「ぼく、知らないよ。手がちょっとさわったら、鳴り
だしたんだもん」
「あんなこといってやがる。そいで坊は、その薬屋へ
よくいくのか」
「うん、じき近くだからよくいくよ。ぼく、そのおじ
さんとなかよしなんだ」
「ふうん」
「でも、なツかなか、うた時計を鳴らしてくれないん

だ。うた時計が鳴るとね、おじさんは、さびしい顔をするよ」
「どうして？」
「おじさんはね、うた時計をきくとね、どういうわけか周作（しゅうさく）さんのことを思い出すんだって」
「えツ……ふうん」
「周作って、おじさんの子どもなんだよ。不良少年になってね、学校がすむと、どっかへいっちゃったって。もうずいぶんまえのことだよ」
「その薬屋のおじさんはね、その周作……とかいうむすこのことを、なんとかいっているかい？」

「ばかなやつだって、いってるよ」

「そうかい。そうだなぁ、ばかだな、そんなやつは。あれ、もうとまったな。坊、もう一どだけ、鳴らしてもいいよ」

「ほんと?……ああ、いい音だなぁ。ぼくの妹のアキコがね、とっても、うた時計がすきでね、死ぬまえに、もう一ぺんあれをきかしてくれって、ないてぐずったのでね、薬屋のおじさんとこから借りてきて、きかしてやったよ」

「……死んじゃったのかい?」

「うん、おととしのお祭のまえにね。やぶの中のおじ

いさんのそばにお墓があるよ。川原から、おとうさんが、このくらいのまるい石をひろってきて立ててある、それがアキコのお墓さ、まだ子どもだもんね。そいでね、命日に、ぼくがまた薬屋からうた時計を借りてきて、やぶの中で鳴らして、アキコにきかしてやったよ。やぶの中で鳴らすと、すずしいような声だよ」

「うん……」

ふたりは大きな池のはたに出た。むこう岸の近くに、黒く二、三ばの水鳥がうかんでいるのが見えた。それを見ると少年は、男の人のポケットから手をぬいて、両手をうちあわせながらうたった。

「ひィよめ、
ひよめ、
だんご、やァるに
くウぐウれッ」
少年のうたうのを聞いて、男の人がいった。
「いまでもその歌をうたうのかい？」
「うん、おじさんも知っているの？」
「おじさんも子どものじぶん、そういって、ひよめにからかったものさ」
「おじさんも小さいとき、よくこの道をかよったの？」
「うん、町の中学校へかよったもんさ」

「おじさん、また帰ってくる？」
「うん……どうかわからん」
道がふたつにわかれているところにきた。
「坊はどっちィいくんだ」
「こっち」
「そうか、じゃ、さいなら」
「さいなら」
少年はひとりになると、じぶんのポケットに手をつっこんで、ぴょこんぴょこんはねながらいった。
「坊ゥ……ちょっと待てよォ」
遠くから男の人がよんだ。少年はけろんと立ちど

まって、そっちを見たが、男の人がしきりに手をふっているので、またもどっていった。

「ちょっとな、坊」

男の人は、少年がそばにくると、すこしきまりのわるいような顔をしていった。

「じつはな、坊、おじさんはゆうべ、その薬屋のうちでとめてもらったのさ。ところがけさ出るとき、あわてたもんだから、まちがえて、薬屋の時計を持ってきてしまったんだ」

「…………」

「坊、すまんけど、この時計とそれから、こいつも（と、

がいとうの内かくしから、小さい懐中時計をひっぱり出して）まちがえて持ってきちまったから、薬屋に返してくれないか。な、いいだろう？」

「うん」

少年はうた時計と懐中時計を、両手にうけとった。

「じゃ、薬屋のおじさんによろしくいってくれよ。さいなら」

「さいなら」

「坊、なんて名だったっけ」

「清廉潔白の廉だよ」

「うん、それだ、坊はその清廉……なんだっけな」

「潔白だよ」

「うん潔白、それでなくちゃいかんぞ。そういうりっぱな正直なおとなになれよ。じゃ、ほんとにさいなら」

「さいなら」

少年は、両手に時計を持ったまま、男の人を見送っていた。男の人はだんだん小さくなり、やがて稲積（いなづみ）のむこうに見えなくなってしまった。少年はてくてくと歩きだした。歩きながら、なにかふにおちないものがあるように、ちょっと首をかしげた。

まもなく少年のうしろから自転車が一台、追っかけてきた。

「あッ、薬屋のおじさん」

「おう、廉坊(れんぼう)、おまえか」

えりまきであごをうずめた、年よりのおじさんは、自転車からおりた。そしてしばらくのあいだ、せきのためものがいえなかった。そのせきは、冬の夜、枯木(かれき)のうれをならす風の音のように、ヒュウヒュウいった。

「廉坊、おまえは村から、ここまできたのか」

「うん」

「そいじゃ、いましがた、村からだれか男の人が出てくるのと、いっしょにならなかったか」

「いっしょだったよ」

「あッ、そ、その時計、おまえはどうして……」
老人は、少年が手に持っているうた時計と懐中時計に目をとめていった。
「その人がね、おじさんの家でまちがえて持ってきたから、返してくれっていったんだよ」
「返してくれろって？」
「うん」
「そうか、あのばかめが」
「あれ、だれなの、おじさん」
「あれか」
そういって老人は、また長くせきいった。

「あれは、うちの周作だ」

「えッほんと？」

「きのう、十なん年ぶりで、うちへもどってきたんだ。ながいあいだ悪いことばかりしてきたけれど、こんどこそ改心して、まじめに町の工場ではたらくことにしたから、といってきたんで、ひと晩とめてやったのさ。そしたら、けさ、わしが知らんでいるまに、もう悪い手くせを出して、このふたつの時計をくすねて出かけやがった。あのごくどうめが」

「おじさん、そいでもね、まちがえて持ってきたんだってよ。ほんとにとっていくつもりじゃなかったんだよ。

ぼくにね、人間は清廉潔白でなくちゃいけないっていってたよ」

「そうかい。……そんなことをいっていったか」

少年は老人の手にふたつの時計をわたした。うけとるとき、老人の手はふるえて、うた時計のねじにふれた。すると時計は、また美しくうたいだした。

老人と少年と、立てられた自転車が、広い枯野の上にかげを落として、しばらく美しい音楽にきき入った。

老人は目になみだをうかべた。

少年は老人から目をそらして、さっき男の人がかくれていった、遠くの、稲積の方をながめていた。

野のはてに、白い雲がひとつういていた。

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店
　　1968（昭和43）年2月20日初版発行
　　1974（昭和49）年1月30日12版発行
入力：もりみつじゅんじ
校正：門田裕志、小林繁雄
2005年6月5日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。